

念仏聖信仰の一考察

田 中 夕 子

はじめに

『一遍聖絵』（一二九九年成立）には、一遍（一二三九～八九）が聖徳太子（五七四～六二二）や教信（～八六六？）、空也（九〇三～九七二）、千観（九一八～九八三）、良忍（一〇七三？～一二三二？）をはじめとする往生伝に収録された往生人の遺跡を訪れた姿や、往生人の挿話が収められている。

一遍が各地の往生人の遺跡を訪問する目的の一つは、往生人への結縁もあつたと考えられる。一遍が遊行した一三世紀後半、聖徳太子は没後六百五十年程、空也は没後二百五十年程、千観や良忍も亡くなって百年余りを経ていた。死後数百年を経てなお、これら往生人が一遍を引きつけたのは、そして、往生人の遺跡が残り続けていたのはいかなる理由であらうか。

小稿では、『一遍聖絵』に言及された往生人、なかでも良忍を中心に教信、空也等に対する信仰を、一四世紀中頃まで

の伝記や説話、宗教者の著作物等をもとに考察していく。

これら三人は、生涯において念仏を称え続けた念仏聖であつた。三人の挿話は、一三世紀後半までに複数の説話集や著作物に収録されていた。また、一三世紀後半頃から彼等の肖像や絵巻物などが造形化され、祖師として尊崇されていた⁽¹⁾。

この時期は法然門流の良忠や親鸞等が各地で教化を行つていた。また、平安時代末から高野聖や善光寺聖等の念仏聖が全国を遊行して念仏を勧進して⁽²⁾いた。一遍は、これら念仏聖たちの活動が活性化するなかで、祖師化された念仏聖の往生人の遺跡をめぐって、その遺跡に集った念仏者をはじめとする人々に念仏を勧め、一遍の念仏を効果的に布教したものと考える。

一 良忍

一遍は熊野権現より「融通念仏すすむる聖」と呼ばれた

『一遍聖絵』卷三⁽³⁾。『一遍聖絵』では融通念仏は良忍より始まったと説かれる。

良忍伝に関しては、歴史的な良忍像と融通念仏の祖としての研究等が先学によって行われてきた。佐藤哲英・横田兼章⁽⁴⁾両氏の研究は、歴史上の良忍と融通念仏の祖として語られた良忍像の形成に主眼を置いた総合的な研究である。しかし、融通念仏の祖以外の良忍像に対する言及がなされていない。西口順子氏は、良忍伝は僧伝として書かれたものと宗祖伝として融通念仏の布教伝道を目的に作成されたものとに分けられるとし、その他、良忍の行状の一部で靈驗を主として記されたものに説話類があると分類している⁽⁵⁾。

小稿では、西口氏の分類を念頭に置きながら、良忍に関する挿話が一三世紀以降、いかなる展開を遂げたのかを検討していく。

○往生人としての良忍伝

良忍の伝記の収録は、往生伝が最初となる。『後拾遺往生伝』(以下『後拾遺伝』)中(一九)⁽⁶⁾、『後拾遺伝』下(三)(一一三七～三九年成立)、『三外往生記』(三三)(一一三九年成立)では、良忍の生涯と往生に関する奇瑞をあげる。これら三伝において、記事は統一しておらず、一二世紀後半の時点では良忍伝は確立していなかったと考えられる。しかし、一三世紀になると良忍の様々な挿話が説話集に収められていた。

○権者としての良忍伝

『古事談』三ノ一〇一(一三世紀初頭成立)は、良忍の一つの靈驗譚に焦点を当てる。冒頭で「大原の良仁聖人は権者なり⁽⁷⁾」と述べ、その神格化を印象づけている。同様の内容は『十訓抄』一〇ノ六〇にも収められている。

○融通念仏の祖師としての良忍伝

『古今著聞集』五三(一二五四年成立)は、融通念仏の祖師としての説話である。先述の説話よりも良忍の融通念仏に関する奇瑞の時の年齢や内容などが具体的(四六歳の時、阿弥陀の夢告で「円融念仏」を勧められて念仏勧進を行ったこと、鞍馬寺の毘沙門天や諸天が良忍に帰依したこと等の靈驗、名帳の存在、享年が六一歳等)である。

『融通念仏縁起』(一二三四年成立)も同じく融通念仏の祖・良忍の姿を描く。良忍は、縁起のなかで顕密無双の碩徳から遁世僧へ、そして融通念仏勧進の僧へと変遷している。

一三世紀末になると良忍は融通念仏の祖師として認知され、『本朝祖師伝記絵詞』(善導寺本)卷三では、「良忍上人の融通、神祇冥道ニハすゝめ給とも、凡夫の望ハうとうとし⁽⁸⁾」と批判された。その一方で『一遍聖絵』卷三では、融通念仏は「大原の良忍上人、夢定の中に阿弥陀仏の教勅をうけ給て」はじめたものであり、一遍は熊野権現より「融通念仏すゝむる聖」と呼ばれた。

○声明の祖師としての良忍伝

『声明源流記』(一三世紀後半～一三三二年成立)は、良忍を「声明祖師。音曲宗匠⁽⁹⁾」と位置づける。この書では、良忍の叡山での所屬が東塔阿弥陀坊堂僧であったこと、慈覚大師からの声明の流れを汲んでいることなど、天台との関わりを繰り返し述べる。また、本覚房という房名、尾張国人という出自、「大原松林院」に入ったこと等それまでの説話では見られなかった記事が収められている。声明の祖師としての姿は、『野守鏡』下(一二九五年成立)にも見られる。

以上取り上げた挿話を整理すると、最初期は簡潔な伝記であつたが、説話の成立時期が下ると融通念仏や声明に関する挿話が説かれ、具体的な内容の肉付けがなされた挿話が増えていた。また、融通念仏の祖師としての説話のなかには、声明の祖師としての姿が描かれていなかった。

○総合的な良忍像

『元亨釈書』一一では、それまで撰述されてきた良忍の生涯、靈驗、祖師的な姿を取り入れて再構成している。良忍は顕密僧であり、また声明梵唄の祖、融通念仏の祖と総合的に説かれていた。

内容は『後拾遺伝』や『三外記』『古事談』『古今著聞集』などの記事をまとめたものであるが、初出の記事も多い(尾州富田の人、師は良賀、八字文殊法を修すと庭の大石が獅子に変わ

った挿話、阿弥陀經の放光等の靈驗譚等)。また、融通念仏は『古今著聞集』では阿弥陀仏の勧めとなっていたが、『元亨釈書』では毘沙門天の勧めとなっている。

以上のように良忍伝は、往生人としての良忍伝に始まり、収録される書物の成立年代が下るにつれて、権者としての良忍像、融通念仏の祖師としての良忍像、声明の祖師としての良忍像が説かれ、やがて総合的な良忍像が創出されていたことがわかる。

融通念仏の祖師として説かれた書物のなかには、声明の祖師としての姿が描かれていない傾向にあつた。また、声明の祖師的な姿が描かれた書物では、天台声明との関係を強調していると共に、融通念仏に関する靈驗が省略される傾向にあつた。これらのことを考慮すると、声明の祖師としての良忍像を説いた人々は天台の僧侶が中心であり、良忍を融通念仏の祖として説いた人々とは一線を画していたものと考えられる。

二 教信・空也

(1) 教信

一遍は晩年、教信ゆかりのいなみの教信寺を訪れており(『一遍聖絵』巻九)、臨終はいなみの島にて臨終したいの思いも抱いていた(同巻一一)。

賀古の沙弥・教信の伝記は、勝（証）如伝に付属するものから始まった。教信から往生の告知を受けた勝如の説話は、『往生拾因』で説かれたものが基本となっている。記事はその後、成立年代が下るにつれて徐々に変化したり、具体性が表れたりしている。やがて、一三世紀に入ると教信の説話が独立して語られる挿話も見られる。説話のなかでは、勝如も教信も顕密僧から遁世僧へ、やがて念仏を勧進する聖となっている。

右近純教氏は教信の説話を、勝如伝に付属するもの、教信のみの伝、自己省察に伴い起こる教信伝に分類した⁽¹⁰⁾。

勝如伝に付属する教信伝は、『日本往生極楽記』二二（九八五年頃成立、以下『極楽記』）、『往生拾因』（一〇九九～一二〇四年成立）、『今昔物語集』巻一五―二六（一二世紀前半成立）、『後拾遺伝』上（一七）、『私聚百因縁集』八（二）（一二五七年成立）、『元亨釈書』巻九、感進一（一二三二年成立）等がある。また、『往生拾因』や『後拾遺伝』の記述によると、それらが書かれた一一世紀末から一二世紀の早い時期において、勝如の別伝があったことが知られている。

教信の伝記について、信瑞『往生拾因私記』⁽¹¹⁾は、教信は「法相宗碩学因明論達者同愚称名也云云。悟阿云此事敬西法師義也」と記述する。一三世紀後半から一四世紀前半の法然門下の一部では、教信は法相の碩学であったことが説かれて

いたことがわかる。

また、自己省察に伴い起こる教信伝に分類される『一言法談』（一二八五～一三〇〇年成立）、『改邪抄』（一三三七年成立）等では、教信の僧とも俗ともいえない姿に注目していた。このように教信は法然や親鸞門下の著作物に教信説話が収められており、念仏者の間で教信が高く評価されていたことがわかる。

（2）空也

『一遍聖絵』巻四では、おどり念仏は空也が始めたものと説く。そして、踊り念仏を学ぶ者は多かったが利益は広まらなかった、しかし、一遍に至って機が熟して踊り念仏が盛んになったと説明する。

空也に関する挿話も、中世数多くの説話集や著作物に取り上げられた。空也の説話については、かつて拙稿で論じたこと⁽¹²⁾をまとめると、『空也誄』『極楽記』の空也は、貴賤を問わない勧進活動、積極的な人的交流により阿弥陀聖・市聖と呼ばれ、それを継承した説話集においては、念仏勧進の先達として尊崇された。それが九条良経の子、慶政が承久四年（一二三二）頃に編した『閑居友』巻上（四）では、山中にいた空也が「あなもののさはがしや⁽¹³⁾」と、弟子たちからも姿を消し、遠ざかった。その空也が市のなかで「後の世を忘れたる人」の多いことを嘆き活動したとする。慶政は、この空也上

人のかしこきはからいに随い「身は錦の帳の中にありとも、心には市の中にまじはる思ひをなすべき」だと述べている。

このように、説話集を時代をおって読み解くと、編纂者により社会の要求を踏まえた「空也像」が創出されていることがわかる。

おわりに

以上、念仏聖の往生人の挿話を考察した。

良忍は、往生人としての姿に始まり、その後、権者として、融通念仏の祖師として、声明の祖師としての良忍像が説かれ、やがて総合的な良忍像が創出されていた。『一遍聖絵』は、良忍を融通念仏の祖師として取り上げており、融通念仏を称えた一遍の祖として説かれていた。

教信の挿話は、一三世紀後半から一四世紀前半にかけて『往生拾因私記』『一言法談』『改邪抄』等浄土系の僧侶の著作物に収められており、念仏者の間で教信が高く評価されていたことが知られる。一三世紀後半は一遍が活躍した頃でもあった。一遍はそのような教信に対する信仰の高まりを汲み、教信の遺跡の寺院を訪れたものと考ええる。

空也は、『極楽記』により念仏の祖と位置づけられ、鎌倉期に入ると数多くの説話に収められ、その名が広く知れ渡っていた。このような背景のなかで、空也は『一遍聖絵』のな

かで踊り念仏の祖として位置づけられ、一遍の先達として説かれた。

小稿で取り上げた三人の念仏聖は、文学作品にも取り上げられていたが、一登場人物としてだけではなく、宗教集団の祖師として語られていたのである。

往生人を祖師として戴いていた宗教集団は、普及していた往生人の挿話を自身の集団の宗教的立場を説明するために用いていた。一方で既存の、またこの三人を祖師としない別の念仏集団も自らの立場を説明するために往生人の念仏聖の挿話を利用していった。このように往生人の挿話を語り続けた集団があったことにより、往生人の遺跡も注目が集まり、信仰を集め、その結果、一遍をもひきつけ、その姿が『一遍聖絵』に描かれることとなったものと考ええる。

- 1 良忍は一四世紀初頭制作『融通念仏縁起絵巻』以降、数多くの転写本が造られた（松原茂「絵巻 融通念仏縁起」〈『日本の美術』三〇二、至文堂、一九九一年〉）。教信は兵庫・教信寺に鎌倉時代の作と推定される教信の頭部の像が伝来している（齊藤孝「兵庫県加古川市の教信寺木彫沙弥教信頭像について」〈『大和文華』一〇九、二〇〇三年〉参照）。空也は六波羅蜜寺の他、各地に空也像が残されている（拙稿「遊行像の系譜——京都・六波羅蜜寺の空也像をめぐる想像力——」〈『密教図像』一八、一九九九年〉参照）。

- 2 平安時代中期から鎌倉時代にかけて活動した念仏聖について

念仏聖信仰の一考察(田 中)

五二

は、井上光貞『新訂 日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九七五年)、五来重『増補 高野聖』(角川書店、一九七五年)、同『善光寺まいり』(平凡社、一九八八年)、伊藤唯真『聖仏教史の研究』(『伊藤唯真著作集』一・二巻、法蔵館、一九九五年)等参照。

3 小稿引用の『一遍聖絵』は『一遍聖絵』(岩波文庫、二〇〇〇年)による。

4 佐藤哲英・横田兼章「良忍伝の研究」(融通念仏宗教学研究所編『良忍上人の研究』大念仏寺、一九八一年)。

5 西口順子「院政期の大原別所——良忍伝をめぐって——」(初出「院政期に於ける別所浄土教の考察——良忍上人伝をめぐって——」〈『史窓』一五、一九五九年〉、後『平安時代の寺院と民衆』(法蔵館、二〇〇四年)に収録)。

6 『後拾遺伝』中巻の良忍伝は後世の加筆と考えられているが、加筆年代については、承久二年(一二二〇)以前と考えられている(前掲註5西口論文参照)。

7 『古事談 続古事談』(新日本古典文学大系、岩波書店、二〇〇五年)。

8 中井真孝編『善導寺蔵『本朝祖師伝記絵詞』本文と研究』(佛教大学アジア宗教文化情報研究所、二〇〇七年)。

9 『大日本仏教全書』。

10 右近純教「教信沙弥の研究」(『無尽灯』二二—九・一〇、一九一七年)。

11 『浄土宗全書』第一五巻。明暦元年(一六五五)に刊行された『往生拾因糅要集』引用の『進行集』(散逸)では、教信の詳しい伝記が説かれている(佐々木令信「沙弥教信説話について」〈『真宗研究』二五、一九八一年〉)。

12 拙稿「説話における空也の研究——『空也誄』との比較をとおして——」(『印度学仏教学研究』五〇—二、二〇〇二年)。

13 『宝物集 閑居友比良山古人霊託』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三年)。

〈キーワード〉 良忍、教信、空也、『一遍聖絵』

(佛教大学総合研究所特別研究員)